

特定非営利活動法人

レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

2023年
3月1日
No. 137

隔月1回発行

ひきこもり

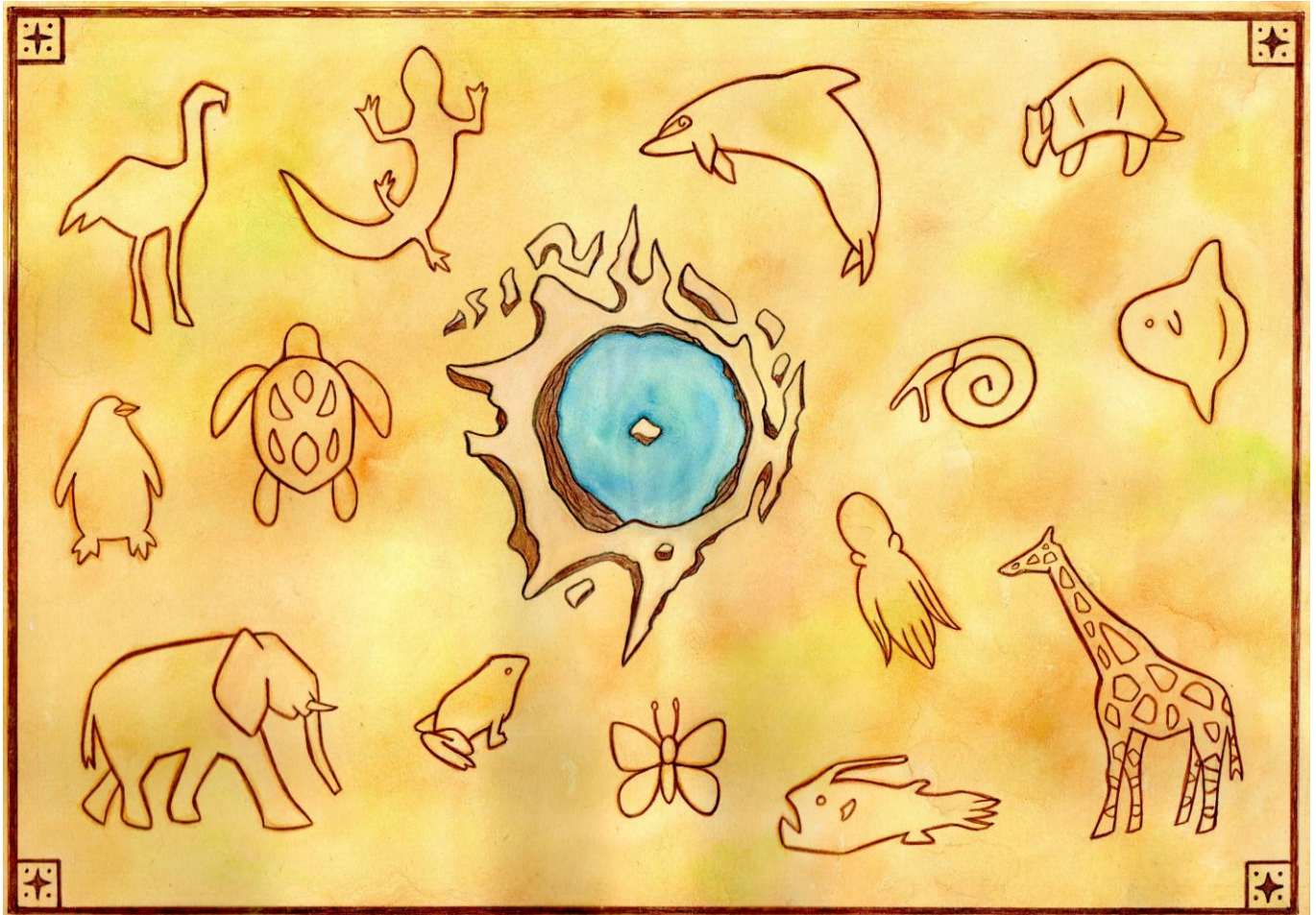


イラスト 小松 英行



会報は札幌市さぽーとほっと基金助成事業・ひまわりピア・サポート基金により作成されています

Index

- 2ページ 北海道新聞に掲載「稚内にひきこもり中高年の居場所づくりを」ほか／刊行物の紹介～北方ジャーナル「自身の親の介護と看取りで痛感した支え合いの必要性」
- 3ページ 「地域で支える」から「地域で生き抜く」へ 田中 敦
ハグレメタルさんが苦勞の表彰を授与
- 4～5ページ
ひきこもり VOICE STATION in 北海道札幌市
- 6～7ページ
シリーズひきこもりと高齢家族介護(4)大田原 守穂さん
- 8ページ こちら事務局／編集後記

8050問題 稚内で札幌の団体講演会



【稚内】「地域で支えるひきこもり講演会」(市主催)が、稚内総合文化センターで開かれた。レタ・ボスト・フレンド相談ネットワーク(札幌)の田中理事長が、80代の親が50代の子どもの生活を支える8050問題について解説。約50人が参加し、70代以上の参加者が目立った。

「17日開催され、田中理事長は「1000年代のひきこもりは若者の問題だったが、高齢化が進み、難題が起きている」と指摘。中歳のひきこもりは長期化する傾向があり、親が亡くなった後孤立死が懸念されるとも明した。効果的な支援策として「居場所づくり」を挙げ、「ひきこもりの人は苦しまないでほしい」とも述べた。会場には、相談や居場所があれば、相談や支援が受けられると、田中理事長が述べた。

ひきこもり中高年の居場所づくりを

←2月25日付北海道新聞(留萌宗谷版)2月17日に開催された8050問題についての講演会で登壇した田中理事長は、8050問題が深刻化する中、「求められるのはマイルドなおせっかい」とコメントした記事が掲載された。

「マイルドなおせっかい」心掛けて

支援は「おせっかい」でいい、近頃の家族で支えるのは難しい。田中理事長は「マイルドなおせっかい」を勧める。おせっかいという言葉は、昔は「世話焼き」という意味で使われていた。おせっかいが悪いのではなく、おせっかいが足りない。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。

支援は「おせっかい」でいい、近頃の家族で支えるのは難しい。田中理事長は「マイルドなおせっかい」を勧める。おせっかいという言葉は、昔は「世話焼き」という意味で使われていた。おせっかいが悪いのではなく、おせっかいが足りない。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。

©北海道新聞社

1月17日付北海道新聞生活くらし欄「みんなの相談室」→15年ひきこもり続ける息子に悩む70代の母親に対して田中理事長が対応し、「まずは世間体を気にせず、抱え込まず支援機関に相談してほしい」と回答した。

みんなの相談室

ひきこもる40代息子 将来が心配

田中 敦さん

支援機関に相談 孤立防いで

ひきこもりに関する主な相談窓口

- 北海道ひきこもり成年相談センター、札幌市ひきこもり地域支援センター
- 011-863-8733
- 受付時間 平日午前9時～午後4時
- 相談料 無料
- 相談先が遠くの場合は「このみ」/カバリー-総合支援センター/「このみ」/カバリー-総合支援センター
- 011-863-8733
- 受付時間 平日午前10時～午後7時
- 相談料 無料
- 相談先が遠くの場合は「このみ」/カバリー-総合支援センター
- 090-3880-7048
- 受付時間 平日午前10時～午後7時
- 相談料 無料
- 相談先が遠くの場合は「このみ」/カバリー-総合支援センター
- 090-3880-7048
- 受付時間 平日午前10時～午後7時
- 相談料 無料
- 相談先が遠くの場合は「このみ」/カバリー-総合支援センター

田中理事長は「おせっかい」を勧める。おせっかいという言葉は、昔は「世話焼き」という意味で使われていた。おせっかいが悪いのではなく、おせっかいが足りない。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。おせっかいが足りないから、おせっかいが必要。

刊行物の紹介

『北方ジャーナル 自身の親の介護と看取りで痛感した支え合いの必要性』

月刊情報誌「北方ジャーナル」2023年3月号 ルポ「ひきこもり」90

中高年になった当事者の中には親の介護を続ける人や既に両親を亡くした人も少なくない。昨年相次いで両親を亡くした田中理事長は自身の体験から親の介護や死後の手続きの難しさを痛感した。「8050問題の先にある当事者の老いを考えることは待ったなしの課題」とし、「北海道ひきこもり老後を支え合う連絡協議会(仮称)」を設立し当事者が病気などで動けなくなったときに支え合えるシステムを構築したいと熱意を込める(本文より転載)。ジャーナリストの武智敦子氏が取材執筆する。(有) Re Studio 発行 A4版 定価 880円



自身の親の介護と看取りで痛感した支え合いの必要性

北海道新聞記者のインタビューで、田中理事長は自身の経験から、親の介護や死後の手続きの難しさを痛感した。この経験から、親の介護や死後の手続きの難しさを痛感した。この経験から、親の介護や死後の手続きの難しさを痛感した。この経験から、親の介護や死後の手続きの難しさを痛感した。

「地域で支える」から「地域で生き抜く」へ

ひきこもり当事者界隈で「地域で支える」という支援に違和感を得る意見が出されていた。その背景には、地方ならではの実態があり、地方圏は人口も少なく狭い地域内ではひきこもりが知られるリスクが高く、地元では活動することに抵抗があるというものである。だから地元以外の地域に赴きそこで活動するほうが気持ち的にも楽になるという見方である。地方に住んでいなければわからない心情だ。

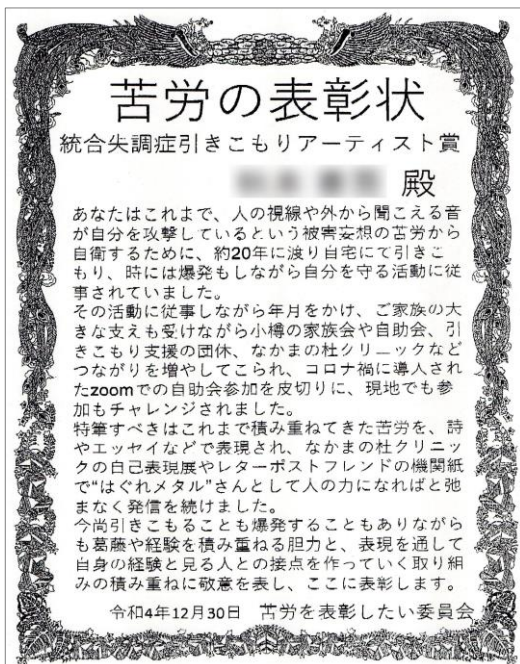
だが、一方ではひきこもり当事者もいずれ歳をとる。親も亡くなり高齢期になれば心身の体調によって地元からすんなり移動することができるだろうか。また交通費の補助を親や支援団体から出ているから今は移動できる北海道の地域特性を考えると今後自腹で地元から他地域に移動することは経費面からも難しくなる。ひきこもりには福祉パスのような交通費補助はない。どうするのか。

このように考えるようになったのは私自身が両親を亡くし自分で生活を維持しなければならなくなったこともある。都会にはない地方の強みというものはないのか?と最近考えることがある。地方には働き盛りの人たちが少なく、地元に残っている人は少ない。そう考えれば、地元でつながりをつくり活動することで新たな選択肢や活路を見出すことができる可能性もあるかもしれない。ひきこもりの老後を考えて地域との関係は避けて通ることはできないのではないか。インターネットがいくら発達しツールが増えても、困ったときにすぐに手助けがなされるかということと距離的にもそれはできないかもしれない。できることは対話を繰り返し自分の話を聞いてもらうことぐらいではないだろうか。

今後も地方で暮らすことを決意するのなら、親亡き後ひとりで暮らし続ける「地域で生き抜く」知恵が必要となる。ぜひ地方からも率直な意見を発信してほしいと思う。
(田中 敦)

←写真-1

ハグレメタルさんが苦勞の表彰を授与



会報ひきこもりに2021年9月号から毎回投稿文をいただいているハグレメタルさんが、なかまの杜クリニック・苦勞を表彰したい委員会から「統合失調症引きこもりアーティスト賞」の表彰を受けました(写真-1)。

表彰状には約20年に渡りひきこもり、家族の支えを受けながら家族会や自助会、病院などとつながりを増やししながら、これまでの苦勞を詩やエッセイで表現したことが書かれていました。

ハグレメタルさんのコメント「自分の歩いてきた足跡を文章にする事でこんな人間でも生きていて良いんだよと引きこもりや精神疾患の方達とそのご家族に少しでも何かを感じてもらえたら、自分も嬉しいです。それプラス表彰状をいただけての僕の感想は僕にエッセイが書く時がくるとは1ミリも思っていなかったのが僕も驚いています」。

ハグレメタルさんはInstagramで自作の詩を公表しています。haguremetaru51のアカウントでご覧いただけます(写真-2)。



←写真-2

ひきこもり VOICE STATION in 北海道札幌市 地域格差を埋めていく、ひきこもり循環型共生社会の実現を考える

12月4日(日)誰もが生きやすい地域づくりについてひきこもり経験者と一緒話すことを目的にしたイベント「ひきこもりVOICE STATION in 北海道札幌市」が札幌市内の会場とオンライン会議システムZOOMを活用して開催された(写真-1)。

同イベントは厚生労働省が主催し全国を6ブロックに分けて各ブロックの主要都市で開催。北海道・東北ブロックを代表して当NPOから田中敦理事長が進行役となり、ピアスタッフの大橋伸和氏と尾澤基氏、専門家の立場からこのころのリカバリー総合支援センター(以下総合支援センター)所長で精神科医の阿部幸弘氏がパネラーとして登壇し「地域格差を埋めていく、ひきこもり循環型共生社会の実現を考える」をテーマに議論を深めた。

当事者・支援者・行政の協働体制

最初に田中敦理事長が、当NPOの活動内容に触れ、居場所支援のような外部に向けた活動だけではなく在宅でもできる当事者にとって負担感の少ない活動も実践していることにも着目し、これらの活動を担うピアスタッフは支援者でも当事者でもない中間的な立場であり、揺らぐなかで内省し活動している、ひきこもり支援現場では必要な人たちであると協調。当事者団体もつ経験的知識と支援団体もつ専門的知識に加え、行政のバックアップによる三位一体の協働体制を目指し、ひきこもりという貴重な経験に対価を示すことが循環型共生社会の実現につながると指摘した。

パネリストの紹介

阿部幸弘氏は、総合支援センターで精神科医師として多くのひきこもりで悩む当事者や家族の対応をしてきた。そのほか就労継続支援事業所などを運営。総合支援センターでは、家族の訴えに伝えられる支援を柱としながら、当事者一人ひとりが孤立せずに寄り添える支援体制をポリシーとしている。阿部氏は「社会がひきこもりを怠けなどと揶揄するスティグマ化にも問題がある」と指摘した。

居場所「よりどころ」のピアスタッフとして活動する尾澤基氏は中学1年から不登校となり、真夏でも窓を開けることができない状況に陥ったが、20代に入り親の入院を機に家庭内での役割が増え気楽に生活できるようになり、ひきこもり地域支援センターに相談。その後「よりどころ」に参加。当NPO主催のサテライト事業や研修会で経験談を語るなど活動の幅を広げてきた。

同じく「よりどころ」のピアスタッフとして活動する大橋伸和氏は小学4年生から13年間場面緘黙で苦しみ、現在は発達障がいやうつ病を抱えながら相談室所属のピアサポーターや自分の抱える生きにくさを講演会や新聞雑誌などで公表する活動にも従事。「無償で行う活動もあり、親元で暮らしているから生活が成り立っている」と経済的な困難さにも言及した。

続けて行われたシンポジウムでは「ひきこもり循環型共生社会」の実現について議論した。発言内容に編集を加えて採録する。



(写真-1)
札幌市内で開催された会場の様子。左から田中敦理事長、大橋伸和氏、尾澤基氏、阿部幸弘氏

地方圏の現状と課題（以下敬称略）

田中：支援センターには北海道内から年間3千件を超える相談があるが、そこからみえる地方の現状について聞かせてほしい。

阿部：道の保健所にも相談できるので相談件数の実数はかなり多いと感じる。札幌市は当NPOと協働で居場所支援を実施しているため件数が多くなっているのではないか。その意味で地方圏にも支援センターができて居場所も作られたら相談件数がより増えるように感じる。

田中：札幌で居場所を開催しても地方圏の当事者は、移動距離の長さや交通費の負担増もあり参加が困難なのが実情だ。当事者の立場からどのように思うか。

尾澤：移動距離、時間、交通費がかかることも気になる。私が当事者会などに出席するときは親に出してもらっていたので、自分では稼いでいないためお金が減ることの重さを強く感じる。当事者会や相談機関に繋がったとしても自分に合わない場合、別機関に行くにしてもお金はかかる。自分に適する相談機関の選択の幅があると良い。

大橋：人口の少ない地方の場合、当事者にとって地域の目が厳しくなるため、隣町の相談機関に行くこととする。そのため交通費がかかるデメリットもあると思う。

ひきこもりについての多様な生き方

田中：既存の企業で働く生き方もあれば、ピアスタッフとして働く生き方もあると思うが、そのような多様性のある働き方をどう捉えるか。

阿部：100万人もひきこもっている人がいて、

そのなかには状況を変えたい人も多くいるので、ひきこもり経験を語り相談にものれるようなピアサポーターを活用していくことがよいと思う。また人材不足を解消したいと希望する中小企業と働きたいと願う当事者をマッチングさせていく仕組みがあればよいのではないか。

尾澤：当事者のなかには性格も千差万別で才能豊かな人がいるが、その人に合った働き方ができないため多様な生き方ができないと感じる。その一方で、ひきこもり以外の人たちも多様な生き方ができないと感じる。ひきこもりに限らず今の社会で多様な生き方ができるのか疑問だ。

大橋：ひきこもりのピア・サポートには大きな役割があるが、誰でもできるものではない。また（生活を安定させるぐらいに）稼ぐことができないため別な仕事をせざるを得ない。これは大きな損失だと思う。おひとり様就労など色々な働き方があってよいと思う。否定される社会のなかで自分に何ができるのかわからない精神状態に陥っているようにも感じる。

阿部：現在の社会はひきこもりの方だけ生きにくさがあるのではなく、一般の方も意義に働いていない社会なので、その人たちも自分の苦しさを語ってほしい。そして今の社会の課題についてひきこもり当事者と語り合ってほしい。

当事者と専門職との協働

田中：多様性ある働き方として専門職と当事者の協働が必要になると思う。精神科領域では実践されているが、ひきこもり領域では未知数だがどう思うか。

阿部：病気を経験した人でなければわからないこととあるので、医療現場でピアの人たちとコラボレーションすることは良いと思う。ひきこもりについても様々な相談機関で活躍するのは良いと思う。逆にピアの立場から専門職に対するアドバイスがあれば知りたい。

尾澤：私は居場所では参加者にアドバイスをしたことはない。自分のひきこもり経験が全ての当事者に当てはまらないし共感してもらえないが、ひきこもり未経験者よりは当事者を理解するための情報は多く持っていると思う。

大橋：私は障害者の相談室でも専門職と一緒に課題を抱える人への対応をさせてもらっている。そのときに私が経験したことを話すことで全ては解決しないが、理解してもらえる部分もある。当事者は親や教師などから散々アドバイスを受けてきたので、あえてアドバイスをしないうピアサポーターの方に親和性を感じるのだと思う。

田中：ひきこもりの経験はネガティブでありマイナスに捉えられることが多いため、これをどのようにプラスに転換して社会で活かしていくか。これが「ひきこもり循環型共生社会」に込められているメッセージだと思う。生きにくさを感じている当事者は多いので堂々と「ひきこもっている」ことが言えるような寛容な社会をつくっていくことが求められていると感じる。

同イベントの様子はYouTubeで動画配信されています。他の地域で開催された模様も視聴可能です。
<https://www.youtube.com/@voicestation4467>

シリーズ ひきこもりと高齢家族介護（第4回） 大田原 守穂さん～自分のなすべきことを知り寄り添って生きる

40～50代のひきこもり当事者と高齢の70～80代の親が同居し続ける「ひきこもり8050問題」。ひきこもる当事者が高齢の親の介護をすることが珍しくない状況を迎えています。本稿では8050問題でとくに高齢の親の介護生活を体験する当事者の方々にお話しを伺い、これからのひきこもりと高齢家族にとって有益な情報をお届けします。第4回はひきこもり当事者として居場所「よりどころ」や「SANGOの会」に参加する大田原守穂さんに、ご自身のがん闘病と認知症の両親に対する思いを伺いました。

自己紹介と家族との関係

職業は大工ですが現在は仕事をしています。年齢は58歳。家族は妻と息子の三人暮らし。生活保護も検討しましたが息子が母親に対して並々ならぬ愛情があり、母親の愛車を奪われたくない理由から息子に全額生活費の面倒をみてもらい生活を維持しています。両親とは別居しています。家族関係は良好です。

両親が介護に至るまでの経緯

私は昨年11月にすい臓がんで入院しました。病気の私に対して同情してくれた父（85歳）は、それまで普通に生活していたと思っていました。ところが父の表情が非常に暗いため事情を尋ねると、約1年半に渡り母（83歳）から虐待を受け苦しんでいたことがわかりました。母は父に対して猜疑心が強くなり妄想が激しく、寝ている父を叩くなどの行為が頻繁に行われました。両親二人だけになると虐待がはじまるため、年末年始にかけて自宅に親を招いたり私が両親宅に泊りに行くこともありました。あるとき母親が父親に殴りかかる瞬間を目の当たりにしてショックを受けました。私の病気がきっかけで両親の状況が把握できたことは良かったと思います。

知人で認知症に精通するカウンセラーに両親のことを相談した際、被害妄想の母よりも父の方が認知症の程度が重いと言われました。父の様子をみていると食事が終わっているのに「飯はまだか」と尋ねたり、自宅にいるのに「帰る」といった言動がみられました。

沖縄旅行で得られたこと

私は双極性障がいがあり週1回デイサービスに通っています。そこで私を担当するケアマネジャーに両親について相談したところ、親の介護認定を勧められました。認定を受けるために手始めとして父親を物忘れ外来に連れて

行こうとしましたが断われ私自身の鬱がひどくなりました。

良いこともありました。今年の1月に両親と妻と私の4人で沖縄旅行に行きました。心配もありましたが、それまでひきこもり傾向の強かった母親が旅行の前に散歩をするようになりよく話すようになり日に日に改善しました。

また旅行中機嫌のよいときに手の震えが続いている両親に「病院へ行こう」と誘い、承諾してくれたため近日中に受診する予定です。

大きな収穫としては父と母が自宅近くに転居して目の届く場所で住むことになったことです。私は正直に「死んでいく自分を支えてほしい」と懇願しました。それは両親のためでもありますが、私自身が死んだ後に妻を孤立させたくない思いもあり、お互いに助け合っていこうという結論になりました。

がんの宣告を受け自分のなすべきことを知る

私が終末期のがん宣告を受けたのが今年の11月のことです。私は「やっと死ねる」と思いました。これまで20数年間抱えてきた躁鬱病を繰り返してきましたが死にたくても死ねませんでした。だからやっとお迎えがきてくれたという感じです。

病院から余命ある間にすべきことを提示され、感謝したい人や謝りたい人のリストを作りました。そのなかで感じたことは、自分は「生きてきた」のではなく「生かされてきた」ということです。私は躁鬱（そううつ）病で不安定な時期が続き、現在はがんになりました。このような自分に今できることは何か。それはこれまで生かされてきたことへの感謝として自分の家族、両親、兄弟に対して自分ができる最善を尽くすことだと思います。私は絶望のなかで20年間過ごし、現在がんになったことで自分の気持ちの整理ができました。今はがんになって失うものよりも得るものの方が多かったと感

じます。療養に専念したいところですが、親の要望があれば実家に出向いて対応しています。私は兄弟のなかでも一番ダメな人間です。それでも両親は私を頼りにしてくれます。長男としての責任もあります。病気で死ぬより過労で死ぬのではないかと思うときもありますが、介護認定に行きつくまではできる限り両親の面倒はみていきたいです。

重篤な状況で両親の世話をする原動力とは

このように思うのも親への感謝があるからです。過去を振り返ると自分は人の役に立つ人間ではありませんでした。ほかの兄弟はきちんとしているのに、私はひきこもり躁鬱で苦しみました。そんな自分に対して両親は決して急かさずに見守ってくれました。もちろん親も悩んでいたと思います。ときには音信不通になることもありましたが。数年ぶりに両親と再会したときは頭が真っ白に変貌しショックを受けました。このままひきこもり続けていたのでは親の死に目にも会えないとの思いから自分の気持ちを振るい立たせたこともありましたが。それでも躁鬱が繰り返し行きつ戻りつ状態でした。そんな私を大切に育ててくれたにもかかわらず、60に手が届く年齢の人間が何もできない苦しさは言葉では言い表すことができません。だからこそ両親への感謝の念が一筋の光となって自分を導いていると感じています。

他の兄弟は土日以外仕事で不在になりますが、私はいつでも両親の対応ができます。対応できる時間だけは持っています。この自分に与えられた役割は8050問題の渦中にある身として一つの利点として捉えて、できることをしていきたい。ただ、いつ双極性の鬱が発生するかわからないので、実際どうなるかはわかりませんが努力して関わっていききたい。不安もありますが今からワクワクしています。

8050 問題に対する支援体制のあり方

私を含めて自分の親が認知症などの病気になったとき、どう対応すればよいのかわからな

い人が多いと思います。私の場合は妻の友人がケアマネージャーでもあり様々な情報を提供してくれました。通常は親がそのような状態になるまでわかりません。相談窓口に行かない限り何も教えてもらえないのが現状です。だからこそ、介護で困っている状態は千差万別のため、それぞれの状態にあった対応をしてほしい。行政だけでは手が回らないのであればボランティアが対応してもよいです。そうしないと孤独死や一家心中に陥るような悲惨なことが次々に起こると思います。

忙しい世の中だからこそ丁寧に寄り添う

私は自分を大切に育ててくれた恩返しではないですが、これからは自宅近くに住むことになる両親に寄り添って生活を続けたい。もちろん私自身も寄り添ってくれる人がいないと生きていけません。私には妻がいますから助かっています。8050 問題の渦中に入ると修羅場になりますから、どういう形であれ寄り添う人がいなくてははいけないと思います。こういった状況のなかでレターポストの田中さんが次年度から「北海道ひきこもり老後を支え合う連絡協議会（仮称）」を実施することを知り、当事者に寄り添うことの大切さをあらためて感じます。私にもできることがあればお手伝いしたいです。

以前、精神科医の田中康夫氏の講演会で「丁寧に生きる」という言葉を知りました。私たちは世の中に逆行して生きています。だからこそ、この忙しい世の中で丁寧に生きることが出来る。それは丁寧に寄り添うことでもあります。行政は縦割りで個人が抱える悩みには応えてもらえません。しかしレターポストのようなNPO 法人が試行錯誤をしながらも丁寧に悩んでいる人に寄り添うことが重要だと思っています。相手と話すのも時間がかかる。信頼関係を結ぶのも時間がかかる。それでも相手が求めていることに丁寧に寄り添う姿勢が大事で、これからもそういった団体運営をしてほしいと願っています。

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

正会員

入会金 1,000 円
年会費 3,000 円

賛助会員

入会金 1,000 円
年会費 2,000 円

寄付金

一口 1,000 円～

入会金、会費納入は、下記郵便振替口座へのお振り込みをお願いします。

●口座記号番号 02700-4-66261

●加入者名 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク



◆居場所「よりどころ」、「SANGOの会」参加に伴う留意事項について

新型コロナウイルス感染防止策として当NPOでは、居場所「よりどころ」当事者会・親の会、また当事者会SANGOの会に安全に参加していただくため、出席にあたっては、マスクを着用のうえ、咳エチケットの徹底、手洗い又は手指消毒を行うなどの留意事項を遵守していただくことをお願いする次第です。たいへん厳しい状況の中での実施ですが、よろしく申し上げます。留意事項については団体ホームページをご覧ください。<http://letter-post.com/>

◆「SANGOの会」例会のご案内

2023年3月は下記日程にて行います。新型コロナウイルス感染拡大による体調不安者に考慮してオンライン例会も併行して実施します。概ね35歳を基点にしていますが年齢に関係なく、ひきこもり当事者や経験者で、同様な仲間と話をしてみたい聞いてみたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。オンライン例会に参加ご希望の方は当NPOホームページから事前申し込みが必要です。詳細は事務局までご連絡ください。

《オンライン初心者(たとえば体調不安がある人、初参加の人)例会》

とき: 3月31日(金) 午後5時30分から7時30分まで

開催のご案内は随時、当NPOのホームページで公開していきますのでご確認ください。

◆居場所「よりどころ」開催のご案内(3月)

(当事者会) 3月20日(月) ※

(家族会) 3月13日(月) ※ 27日(月) ※

開催会場: 北海道立道民活動センター「かでる2.7」10階 1030会議室

(札幌市中央区北2条西7丁目 道民活動センタービル) JR札幌駅南口から徒歩13分

開催時間: 午後1時30分から午後3時30分まで(短縮開催)

《オンライン当事者・家族会》

(当事者会) 3月15日(水) (家族会) 3月22日(水)

開催時間: 午後1時30分から午後3時30分まで

利用対象: ひきこもり当事者及びその家族

参加費: 無料 事前申込不要 直接会場にいらしてください。オンラインは、事前申し込みが必要です。

※印の日は、ひきこもり地域支援センター相談員の参加予定日です



☆刊行物のご紹介

ピアスタッフによる当事者性を活用したひきこもり支援拠点運営研究事業報告書-ピアスタッフの正当な対価保障を目指して-

札幌近隣の小樽市、江別市、苫小牧市で実施されたサテライト事業の内容を網羅しています。居場所におけるピアスタッフの効力と正当な対価についても言及しています。

A4版左無線綴モノクロ全32頁、郵送料込1冊500円

刊行物については事務局までお問い合わせください

☆編集後記☆

3月に入りそろそろ雪解けが進行し春を迎えたいというところです。年度末は当NPO法人としてもまとめの作業や新年度事業の準備が山積しており、事務局は忙しい日々を過ごしております。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください